

保育計画成果報告書

法人名等	学校法人ろりぽっぷ学園
施設名	認定こども園 ろりぽっぷ保育園
報告者	丹野 ももこ
住所・連絡先	宮城県仙台市若林区沖野字高野南197-1 022-285-5212

○タイトル

～あつまれ！！「にこにこ広場」～0歳から大人まで、笑顔がいっぱいの広場づくり

○主な助成備品

ハイハイクライマー

1, 保育計画策定の目的

- ・異年齢児が行き来する廊下やウッドデッキを活用しての計画
- ・異年齢児が互いの存在を意識し合える広場作り
- ・関わりの中で誰かのためにしてあげたい、してもらって嬉しいという人との関わりや優しさの育ち合い

2, 具体的な実施内容

- ① 異年齢児が行き来する廊下やウッドデッキを活用しての計画
 - ・大人も子どもも挨拶や簡単なやり取り等、日常で様々な人との交流ができるようにハイハイクライマーの凹凸マットや階段を廊下に設置していく。
 - ・未満児保育室前の廊下やウッドデッキも遊びの場として考え、異年齢の交流を深められるようにハイハイクライマーの環境を用意していく。その際に体を動かすゾーンには、階段やトンネルがある高いハイハイクライマー等を組み合わせ用意していくことで体を動かす楽しさを感じたり、段差や降りるなど少し難しい遊びの場面で年上の子が自分の意思で「手伝おうか」と感じたり、「何かしてあげたい」と思えるような環境にしていく。また平坦なマットや凹凸マットを端の方に置き、安全面に配慮しながらゆったりとした空間を作っていくことで異年齢での触れ合いや以上児が未満児に絵本の読み聞かせをする等、保育者だけでなく異年齢での関わり、人と関わることへの喜びや楽しさを感じられるようにしていく。
- ② 異年齢児が互いの存在を意識し合える広場作り
 - ・0歳児に興味を持ち廊下から様子を見に来ている姿や日頃から関わりたいと感じる4, 5歳児の姿が見られていた。子どもたちの姿を大切にし、保育室や廊下で一緒に関わられるような場所を設けていった。0歳児も以上児もゆったりと関わ

れる場にしていくために、敢えて少人数で一緒に遊べるようにしていく。また、廊下も使い交流の場を用意していくことで普段関わりの少ない年齢の子とも関わる機会を増やせるようにしていく。その中で、自分より小さい子との関わりを増やしていき、関わることの楽しさを知り、自ら積極的に関わろうとしたり思いやりを持ち接しようとする姿や、年上の子と接することで人との関わりを楽しんだり、優しくしてもらい喜び等を感じ、異年齢児が互いの存在を感じ交流を深められるようにしていく。

③ 関わりの中で誰かのためにしてあげたい、してもらって嬉しいという人との関わりや優しさの育ち合い

・異年齢が関われるような環境を作っていく中で保育者も側に付きながら互いが関われるような言葉かけや援助をしていくと共に子どもたち同士の関わりを見守っていく。保育者の関わりも丁寧に見せていくことで子どもたちが考えながら自分の意志で「何かしてあげたい」と思い手を差し伸べたり、温かく見守る姿、思いやりを持って関わる姿やその姿から様々な人との関わりを楽しんだり、優しくしてもらい喜び等を感じ、優しくしてもらい一人ひとりが大切にされている経験を積み重ね、心の育ちに繋がるようにしていく。また、ゆくゆくは自分自身も他の誰かに優しくできるような人になってほしいと思いを持ち、遊びの場の環境を整え関わっていく。



3, その成果と評価

○ハイクライマーを設置してみた、環境面での変化

〈0歳児クラス〉

・今年度は0歳児の発達面を促すために、始めは保育室にハイクライマーの環境を出していった。ハイハイを促すように配置したり、体全体を動かし運動面の発達に繋がるようにしていくと興味を持ち自ら体を動かす子どもの姿が見られた。階段やスロープ、湾曲、トンネル等様々な形を組み換え、各月齢に合わせた配置ができたり、つかまり立ちでバランスが不安定な子どもに平坦なマットを置くことで安心して遊びを行える環境にしていくことができた。



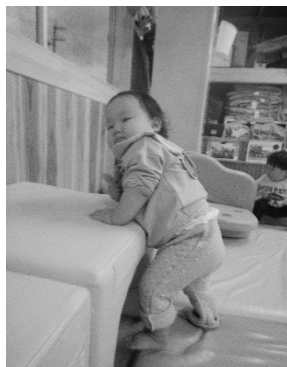
〈異年齢での交流〉

未満児の保育室を覗いたり保育室・廊下でも異年齢の交流が楽しめるように凹凸マットや階段を廊下に配置していくとそこに上り、未満児が何をしているのか覗いたり声をかける以上児の姿やハイクライマーで過ごす未満児の子に「どうしたの?」と声をかけたり側で見守りながら関わる以上児の姿が見られた。また、廊下も遊びの場としてハイクライマーの遊びの環境を用意していき、異年齢での交流を楽しめるようにもしていった。スロープを滑る未満児に「カンカンカン」等踏切のようにして関わる姿や、段差から降りる子の手を持ち援助する以上児の姿が見られた。また、平坦なマットの上でゆっくりと絵本を一緒に読んだり、絵本を見ている未満児に読み聞かせをする以上児の姿があり、互いに関わることを楽しむ姿が見られた。そうしたことで異年齢での関わりが少ない未満児や未満児と関わりたい以上児の交流を深めることができた。



○その環境の中で見られた遊びの姿や身体的な発達

・0歳児へのアプローチとして、ハイクライマーの凹凸や平坦のマットを使い、保育者の援助の元、ずり這いやハイハイを行う姿が見られた。伝い歩きの時期に入ると自ら立ち上がり、始めは平坦な道だったが、凹凸の道にも挑戦し楽しむ姿が見られ、一人ひとりの発達に応じて体を動かせる環境作りをしていった。一人歩きが始まると全身を使い凹凸を楽しむようになった。更に、スロープにも興味を示し、保育者の援助の元、楽しむことができた。歩行が安定してくるとスロープの上を歩くこともできるようになり、平坦や凹凸の道だけでなく、階段やそこからのジャンプにも挑む姿がある。また、1, 2歳児でも体を動かす遊びに使い、登る、滑る、くぐる、ジャンプする等、ハイクライマーを通して粗大運動の発達を促す関わりや環境設定が行えた。





○異年齢の関わりの姿やその中での育ち

〈0歳児の育ち〉

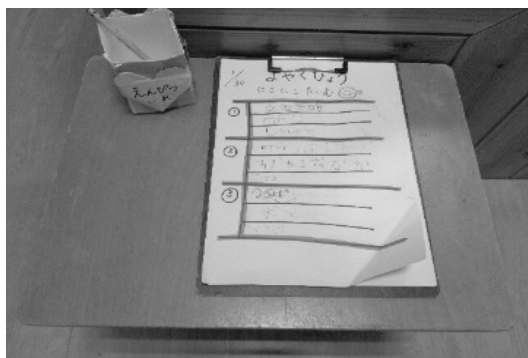
・異年齢の関わりの中で年上の友だちがハイハイクライマーを使い、手を繋いで歩幅に合わせながら進む姿や湾曲のハイハイクライマーをシーソーのように揺らしたり、おもちゃを使いながら関わろうとする姿等が見られた。年上の子どもたちと一緒に遊ぶことを楽しむ姿や関わってもらおうこと、お世話してもらおうことを喜ぶ姿があり、自らも年上の友だちに対して関わりに行こうとする0歳児の姿も見られていった。異年齢の関わりが深まったことで戸外に出て一緒に遊ぶ姿が盛んになっていった。



〈以上児の育ち〉

・以上児からは普段関わるのが少ないからこそ一緒に遊びたいお世話したいという気持ちを持ち、接する姿が見られた。関わる際、始めはどう関わればいいのか戸惑う姿も見られたが、保育者の姿を見て少しずつ自ら関わろうとする姿が見られていき、ハイハイクライマーを使った遊び方に変化していった。ハイハイクライマーの上に玩具を置き、登ってくる子どものペースに合わせ、その玩具を用いて遊びに誘う姿等、子どもたちが工夫して0歳児に合わせた遊びをし、一緒に楽しむ姿が見られた。関わりたいと感じる中で一緒に遊ぶだけでなく‘何かしてあげたい‘‘‘0歳児が楽しめるためにはどうしたらいいのか‘‘等子どもたちなりに考えて関わる姿が見られた。また、0歳児と保育室内で関わる際には、子どもたち同士がゆっくりと関われるよう人数等も工夫していった。その際に5歳児クラスの子どもたちから「名前を書くのはどう?」「お店の順番みたいにしよう!」と提案があり、自分たちで予約の用紙を置

き、名前を記入できるように環境を用意していった。0歳児と一緒に遊びたい年長児が自分で名前を書く姿があり、その中で関わりたいけど自分で名前が書けない年長児の姿もあった。その姿に周りの子が気づき、代わりに書いてあげる姿や少しずつ自分でも書けるように友だちに教えてもらったり文字の練習をする等の姿があり、年長児内でも友だちの困っている姿に気づき助ける姿や0歳児と関わりたい、お世話したいと感じたからこそ自分でも名前を書けるようになりたいと感じ、文字に興味を持つ姿や書けたことにも喜びを感じる姿が見られた。



4, 今後の課題と展望

今後は、子どもの発達に合わせながらずり這いやハイハイを促し刺激になるように凹凸や階段やスロープ等のマットを組み合わせたり、手足を使いながら体を動かす楽しさを感じられるように階段やトンネルや高さのあるマットの置き方を工夫しやってみたいと挑戦できるような環境を用意し全身の使い方を身につけられるように援助をしていながら安全な遊びの場を用意していく。

保育室と廊下を使い、子どもたち主体で関わりを楽しみ深められるような空間を提供していき、その中で身体面の発達や人と関わることの楽しさ、嬉しさ、喜びを感じたり、関わる中で誰かのために何かしてあげたい、してもらって嬉しい等、それぞれの子どもたちの心の育ちに繋がるような環境にしていき、異年齢児が互いの存在を感じられるようにしていくと共に異年齢での関わりを深めていけるようにしていく。

以上